



門 へ 13
2925
巻 15

春色傳家乃花巻之十五

江戸 為永春水著

第廿九回

諸も富は中へ玉衣にふ乃おをりさは鏡つき
まより若木からぬ身へ敏より物くふとい持まてあ
つおきとまづる 一ッおおむさん教なりふもおんは
まどが突におぶの志しへ死んでも忘れぬをいれ
どもおまの親るさぬふの松乃教父の供ううて一

昭和九年
七月六日
購求

あらなひお世になつて居るがうき娘もろおあそば
せねに御婦にあらやうどもお海ねへ義理ごう
けりむうひ思ひ切つて親もろ安んかろうやう
娘女とやめて何知ぞを流し縁付てお世を共
親も福身で居るのあら又お後の為持も何や
せうがお世といふ女房もあつて見ると何程お
と女房にはよく思ふと知が今更にもねへお世を
退ひむしてお世と内へ入ると言ふは成るなら

然うして見るとあらういとお世と情合になつても
お互へに来ろ逢ねへおの両性のまゝとやう今も
言ふなり只おとおと御婦にまらばうてお世にうけ
お世とば冠て被せとふものさうも是でもおあや
やう合ふがいらやせんう子一丁私とやうお世を
退むまのおおさんのお世さんになりたいのとえ
ううい望とも何りませんとおさんか一生けん持を
でお飯食おでも何でもして仕舞へるまでお世

ふとまゝに私をアまどモウ他に居みいりま
せんヨ。あゝまどつて大家の由家老乃お嬢さまと
町人風情で妾側女にさるものう子へサア
お音いなるごらうと思ふうお爺さんの云々
貴い女で居んで有りませヨ。都合較い何で
あらうと奈補橋の唄女乃お音とお飯さまに
なまのこゝとて言つて私乃淋しいまも有りませ
ぬ。是程私をまどと探でも私いかにいれりませ

あゝ私をア死んではおれませヨ。アゝとんでもねえ私
な程なまどとをアまどア尚と私く言ひが有りませ
ん。アゝまどやア私乃私いとお音さまへアト
アどつと私乃私いとお音さまへアト
今じまどいお音さまへアト
お音さまへアト
うゑと新地の水に洗ひあげぬに私乃私いとお音さまへ
又素人のまどと私乃私いとお音さまへ

お音のまどと

[illegible]

嬉しいまのあいの 是れもえんをおおえんのおおえん
 らうとて思ふ者も 一つはえんにおれよ
 て痛く入るやと トキニ お芽出さへ
 お目もこのまが 何うう子達おれ
 実いふるふし 清うながれと
 お前におれと 身はなまを
 何と云つて 承知と為す
 子さうと 何と云つて

まぐと同命を知らぬに申にんと無く
居るもふと又為次第は身への義理とて
清いぬとのまごむと由か娘の娘なら女房
乃何か為次第へ要因は少くもぬが言
限子乃お玉で見るにふ改でも何りま程とに
思ひ込んるのまごむにけりぬ振うて
分る次第のまにても何とやうううと
乃皆坊で居振にぬるのうと呉れ又お玉が

清く茶桶へ掛合と金と渡し年季清く
何と何のうの是も其様おけくおくやと
見れまー澄くもておのさいすーと懐く
二人に見せろづーエモ何とお玉お玉でござぬま
せうお玉お玉清くぬる石金金銀と
居るやうなう通人どお入るやうな
まどやアお玉お玉ぬるお玉お玉
お玉お玉のうに正しくお玉お玉



船うーくさつヨ へ 係旦那が市義知じやア
行く面目はへはなトキニ来たまさんんご世縁と
うけて家の裏のまアにへへ一畝春ぞ是れ
来へへ是はあまの縁ふやあまさんお酌ぞ思を
入やまトまのり一畝うけと松とぶいと春を来へ
先是へは行くは返をといへれやうを返りて
来りやせう へマアつづか 来へへエまご他に生
か頼まれとまうこがわすれう先お暇とまわす
今度ハ作者が何と思つころ 都呂と柳波にまふので
たまにいとがううこがわすれうトまひマ来まの
そくくはへへゆりゆくまのりハ二人がさーおのまの
なる味と味とやゆるまのり 係もはるるさー看
官と係とくまのりへへまのりへへ 新田村あるまのり
の進乃強おふといへ田舎ながらも新屋なる思
家乃進地まのりへへ 鎌倉風に建るさーなる
好ハ好更に田舎おのの暇をを兼ねる花を

今度ハ作者が何と思つころ 都呂と柳波にまふので
たまにいとがううこがわすれうトまひマ来まの
そくくはへへゆりゆくまのりハ二人がさーおのまの
なる味と味とやゆるまのり 係もはるるさー看
官と係とくまのりへへまのりへへ 新田村あるまのり
の進乃強おふといへ田舎ながらも新屋なる思
家乃進地まのりへへ 鎌倉風に建るさーなる
好ハ好更に田舎おのの暇をを兼ねる花を

兄^{にい}と梅^{うめ}咲^さけ^けば孫^{まご}生^うま^まとゆ^いわぬ初^{はつ}婚^{こん}一^{いつ}重^{じゅう}う八^{はち}重^{じゅう}う
毛^け深^{ふか}くお^おお^おくそ^そに時^{とき}あ^ある者^{もの}と恨^{うら}み^み弁^{べん}の^の花^{はな}
乃^{すなは}咲^さふ^ふ杜^つ若^{じやく}林^{りん}ハお^お茶^{ちや}乃^{すなは}流^{りゅう}る^る中^{ちゆう}に花^{はな}盤^{ばん}
の^の松^{しょう}河^がも^も花^{はな}枝^えの^の菊^{きく}に^にあ^あふ^ふ枝^えの^の日^ひう^うげ^げ経^{けい}う^うさ
あ^あふ^ふも^もま^まば^ば時^{とき}日^ひに^にあ^ある^る白^{しろ}妙^{めう}ハ雪^{ゆき}の^のゆ^ゆさ^さの^の銀^{ぎん}世^{せい}家^か
状^{じやう}に^に面^{めん}白^{はく}と^と風^{ふう}系^{けい}ハ^ハ主^{しゅ}の^のふ^ふも^も咄^{はな}う^うく^くと思^{おも}ひ^ひま^まう^うが^が
怪^{かい}形^{けい}なり^{なり}朽^くも^も突^おく^くの^の小^こ室^{しつ}に^に最^{さい}暗^{あん}ま^まど^どく^く流^{りゅう}る^る
ハ^ハ年^{ねん}ハ^ハ十^{じゅう}九^{きゅう}十^{じゅう}八^{はち}ハ^ハ廿^{にじゅう}五^ごに^に是^こら^らぬ^ぬ二^に人^{にん}の^の姉^{あね}姉^{あね}女^を今^{いま}を^を

屋^い乃^の高^{こう}蒲^ぼう^う杜^つ若^{じやく}林^{りん}ハ^ハお^お茶^{ちや}乃^{すなは}流^{りゅう}る^る中^{ちゆう}に花^{はな}盤^{ばん}
い^いう^うる^る人^{にん}れ^れる^る朽^くも^もと^と他^た目^めで^でる^るも^も美^みま^まく^くハ^ハ小^こ万^{まん}ん^ん
ト^ト意^いい^いう^うけ^けて^て煙^{えん}管^{くわん}ハ^ハ甚^{しつ}と^と吸^す付^つて^てあ^あり^りな^なぐ^ぐハ^ハ何^{なん}れ^れそ
ん^んに^に替^かへ^へる^るハ^ハ根^{こん}に^にし^して^て考^{こう}へ^へハ^ハお^お茶^{ちや}乃^{すなは}流^{りゅう}る^る中^{ちゆう}に花^{はな}盤^{ばん}
そ^その^のと^とて^て小^こ万^{まん}ハ^ハ完^{かん}全^{ぜん}な^な煙^{えん}管^{くわん}と^とし^して^て頂^{ちやう}い^いく^く
各^{かく}々^々ハ^ハお^お茶^{ちや}乃^{すなは}流^{りゅう}る^る中^{ちゆう}に花^{はな}盤^{ばん}
居^いる^る人^{にん}ハ^ハお^お茶^{ちや}乃^{すなは}流^{りゅう}る^る中^{ちゆう}に花^{はな}盤^{ばん}
り^りの^のと^と何^{なん}れ^れそ^そ若^{じやく}骨^{こつ}な^なま^まど^ども^も何^{なん}れ^れそ^そあ^あま^ません^{せん}ハ^ハエ^エハ^ハ

なみねに〜ト〜ヨ〜エ素人の
 娘乃澄唯のが好むお花あまう〜
 の方と余程よく思ふお花あまうすすい子
 素さんへ娘女乃姉を乃がやつり好でお花を
 さり〜私の娘を此を若い方へ〜に可也
 ぶ〜お花のに遠いあいよま〜めととおおさんの
 方が私より余程好むに悦らしてお花とヨト
 知く庭より来た夫がむら〜り親と出〜

一エ素さんへお花さんの可也〜い知とふさん
 乃姉を知とふとむら〜して含み〜
 妹も娘も今お花と〜
 候しや〜お花さん私乃目〜
 何れとも言つて〜
 在るる若き娘の由目〜
 堂々ぞぶら〜
 乃何方へ〜

伊勢物語の巻

ものゝ先は宿願へ私が飲りまゝしてゐる
おやせうア

第三十回

「アレも来をまさんがくーいんご人をおい
と娘ーがらせくで笑つて思ッて来アエを
うりハ実ふサア来トヤア他のいんごを喰くア
然る言依然めとさしらヤア叶ひやせんア
其ハとうと来をまさん何時乃るに遠くへおなのど

「先がうけおにみりまゝア来トヤア来
がえと来と来らむお同のく来ハハイ。今
う急乃大車とそいあもさううきんんごゆ
の来が来ア来サ来とヤアあヨ私をヤア
私に知うーい来ア来にそいあもさううき
むおわせん。オモシお二人さん寔に結構アヤ
エと来に格あながむさわひをせアヤア
さう耳好な出ーご子エ来をまさん来い
ておす

おやせうア

十

「コウ来たまは大概に家と揺せら迷く云々」
ずせらぶといはれども出ると聞らうらう「へ」
是は是れうぬとんとまが耳へ透入く恐き入
す此れも先刻くお叱しを致せうとぞんじて
居りす此れどもあんまりお二人がゆふけにい
まうりははれまてうらうツイ面白くうらううも
かして居りしと「へ」お振あうまふお叱
しと揺しすまうト長禪とはドめらふ

そは案を乃深舟進といふ春の太坂の味所
ふく更濃を州な奥と云へる大分派の町人
り「かきそ子判七が次の内乃氣者お振は深
お方といふ子も出来しとまを後継の女房と
あはれ乃悲八が同出し素より徳子の判七也
よとておひとおひいおのそ余計なるをもお
振めとまふの判七は格に判七はあつてお
うらうに判七はあつておうあう人々はあつて

おはれの巻のついで

そのときよゆと
 是比余程の金乃給共河りしと萬石のお為
 とし知しむるを利七が小勝に入揚し守
 人可屯い子ながらも親類乃はおも
 ねばもぶつと後にも懲りぬ乃為に切通しなら
 自分うろ後悔しう致すもあらうんと思ひ
 乃外判七の澤倉へ下りて年強きとも一合
 便りもなく中うち後係乃女房とあはれ
 無度あらうとて人ながら悲ひ出り相判

七を討て逃へて家名を譲りて身を隠す
 せんと鎌倉へ人を遣へて種くねる
 路に於て乃知をさすへ概なく判七の判
 次第に大坂乃家と譲り判を出つて在る
 半分を携へ鎌倉へ下り棄て小勝母子も
 鎌倉へとりとてすゝる若や判七が小勝と
 夫婦にありあらんも知を移るる
 件を金とえりてせし店を執せんと經いり

く人を頼りてゐても更にやゝのま掛り
もあらねどけいして大坂へゆゝんのかを
頼令判七ふいせむともお万ハまさしく
孫をまべせめといふ猪母子にきりとゆぐり
舎んとまより新田村へ頼とに立派なる
家とこゝろへ波水餅傳の栄進が家とを
とし知ろ思ひつゝ名を栄進とあら
ぬめけふに強張るゝ周く風流の客と

頼令判乃年月を送りゝも突ハ新田乃
客の中ふは判七が小猪母子を知りたるものも
何んろとてあり然るにけい程お万とお妻が
祝賀乃名をせしと人傳にきくうば
系たまを頼と見當への波りをけけき
く新田村へいりゝに奉よりお万を系
と弟と係あらぬ申ありお光も情け
ける様とけいせと頼とけいせなるもさき

みず清く入流し世とんとて家世留山家乃孫を
あづめ衆人高名出流の二人と押込め若殿と世
に立しうぶみず清く入流し助と若殿附の家老と
かゝる身は好く強居しとお衆と引合一生安
楽ふ事止うぞ又の乃采屋の進にお衆と別てが
娘とすけは身にも血筋の孫ありとて留山家
ともお衆乃う忠金にのうして衣類と飾らせ
何うとめと留山家へさゝあけふいよく孫生

の助乃孫もふく好く世継のお子と知らめ
うぶお衆色さぬと親を敬百年と采へハ衆
留山家乃花れ衆目お衆世と衆ありふ事家

作者 狂訓亭主人編

春色傳家乃花卷之十五 大尾

